

基本計画書

基本計画書									
事項	記入欄						備考		
計画の区分	大学院の設置								
フリガナ設置者	カッコウホクジン ヒロサキョウトリカクエン 学校法人 弘前城東学園								
フリガナ大学の名称	ヒロサキョウフクシタガクガクイン 弘前医療福祉大学大学院（Hirosaki University of Health and Welfare Graduate School）								
大学本部の位置	青森県弘前市大字小比内三丁目18番地1								
大学の目的	<p>本大学院では地域健康支援に関して深い学識の涵養を図るため、研究の基礎的能力を修得し、地域に暮らす人々を支える高度で知的な素養を兼ね備えた将来の指導者・教育者・研究者の育成を目指している。また、本大学院の修了生は青森県内をはじめ北東北を中心とした医療機関の地域連携室、訪問看護ステーション、地域包括支援センター及び介護老人保健施設等での活躍が見込まれている。本大学院の修了生が輩出されることにより、急増する高齢者への健康支援はもちろん、地域で生活するあらゆる年齢層への複雑・多様な健康課題に対して生活支援サービスの充実が期待できる。</p>								
新設学部等の目的	<p>今日の保健・医療・福祉の環境は大きく変化し、多様化していることから、豊かな人間性とホスピタリティー精神をもち、多職種と協働し、地域に暮らす人々を支える活動を実践できる高度専門職業人の育成を目指す。また、地域における個人・集団を対象とした生活支援に貢献できる教育・研究者の育成も目指す。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限 年	入学定員 人	編入学定員 年次 人	収容定員 人	学位又は称号	開設時期及び開設年次 年 月 第 年次	所在地	【基礎となる学部】 保健学部
	計	2	5	—	10	修士 (地域健康支援学) 【 Master of Community Health 】	令和6年4月 第1年次	青森県弘前市大字小比内三丁目18番地1	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)		該当なし							

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
	地域健康支援学研究科 地域健康支援学専攻	18 科目	5 科目	0 科目	23 科目	30 単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設分	地域健康支援学研究科 地域健康支援学専攻（修士課程）	16 (16)	1 (1)	5 (5)	1 (1)	23 (23)	0 (0)	8 (8)
		計	16 (16)	1 (1)	5 (5)	1 (1)	23 (23)	0 (0)	— (—)
	既設分	該当なし	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
		計	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
合計		16 (16)	1 (1)	5 (5)	1 (1)	23 (23)	0 (0)	— (—)	
教員以外の職員の概要	職種		専任	兼任	計				
	事務職員		15 (15)	10 (10)	25 (25)				
	技術職員		0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	図書館専門職員		1 (1)	1 (1)	2 (2)				
	その他の職員		4 (4)	1 (1)	5 (5)				
計		20 (20)	12 (12)	32 (32)					
校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計				
	校舎敷地	— m ²	25,327.89m ²	— m ²	25,327.89m ²				
	運動場用地	— m ²	3,002.51m ²	— m ²	3,002.51m ²				
	小計	— m ²	33,639.40m ²	— m ²	33,639.40m ²				
	その他	— m ²	363.69m ²	— m ²	363.69m ²				
合計		— m ²	34,003.09m ²	— m ²	34,003.09m ²				
校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計					
	4,549.10 m ² (4,549.10 m ²)	9,072.42 m ² (9,072.42 m ²)	3,507.18 m ² (3,507.18 m ²)	17,128.70 m ² (17,128.70 m ²)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設				
	15 室	4 室	17 室	1 室 (補助職員 1人)	— 室 (補助職員 — 人)				
専任教員研究室		新設学部等の名称		室数					
		地域健康支援学研究科 地域健康支援学専攻		23 室					
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点		
	地域健康支援学研究科	(41,299 [2,762]) (41,299 [2,762])	(264 [68]) (264 [68])	(1,559 [15]) (1,559 [15])	573 (573)	6,224 (6,224)	130 (130)		
	計	(41,299 [2,762]) (41,299 [2,762])	(264 [68]) (264 [68])	(1,559 [15]) (1,559 [15])	573 (573)	6,224 (6,224)	130 (130)		
図書館	面積	閲覧座席数		収納可能冊数					
	663.00m ²	101		51,030					
体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
	714.00m ²	該当なし							

経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	※研究費は、大学300,000円、大学院30,000円 ※図書購入費には電子ジャーナル、データベースを含む
	経費の見積り								
	教員1人当り研究費等		330千円	330千円	—千円	—千円	—千円	—千円	
	共同研究費等		0	0	—千円	—千円	—千円	—千円	
	図書購入費	402千円	200千円	200千円	—千円	—千円	—千円	—千円	
	設備購入費	29,749千円	1,000千円	1,000千円	—千円	—千円	—千円	—千円	
学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	710千円	555千円	—千円	—千円	—千円	—千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金, 資産運用収入, 雑収入 等						
既設大学等の状況	大学の名称	弘前医療福祉大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	保健学部	年	人	年次人	人		倍		青森県弘前市大字小比内三丁目18番地1
	看護学科	4	50	0	200	学士(看護学)	1.10 1.09	平成21年度	青森県弘前市大字扇町二丁目5番
	医療技術学科						1.11		
	作業療法学専攻	4	40	0	160	学士(作業療法学)	1.33	平成21年度	
	言語聴覚学専攻	4	30	0	120	学士(言語聴覚学)	0.82	平成21年度	
	大学の名称	弘前医療福祉大学短期大学部							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	救急救命学科	3	35	—	105	短期大学士(救急救命学)	1.19	平成26年度	青森県弘前市大字小比内三丁目18番地1 青森県弘前市大字扇町二丁目5番
口腔衛生学科	3	30	—	60	短期大学士(口腔衛生学)	0.43	令和4年度		

<p>附属施設の概要</p>	<p>1. 付置研究所：「弘前医療福祉大学在宅ケア研究所」 (1) 目的：在宅ケアに関する研究・実践を推進し、本学の学生及び教職員並びに専門職に従事する者に対する教育支援を行うほか、地域住民の保健・医療・福祉の向上に資することを目的とする。 (2) 所在地：青森県弘前市大字小比内三丁目18-1 (3) 設置年月：平成31年4月 (4) 規模：面積 76.00㎡ 所員 9人（兼務 9人）</p> <p>2. 付随事業：「在宅ケア研究所附属訪問看護リハビリステーション そら」 (1) 目的：指定訪問看護及び指定介護予防訪問看護を事業の目的とする。 看護職員、理学療法士、作業療法士又は言語聴覚士が、要介護状態（介護予防にあつては要支援状態）であり、主治の医師が必要を認めた高齢者に対し、適正な事業の提供を目的とする。 (2) 所在地：青森県弘前市大字小比内三丁目18-1 (3) 設置年月：令和2年4月 (4) 規模：面積 76.00㎡ 所員 8人（本務 5人、兼務 3人）</p> <p>3. 付置研究所：「弘前医療福祉大学短期大学部地域安全防災研究所」 (1) 目的：研究所は、地域の防災及び救急救命に関する研究・実践を推進し、本学の学生及び教職員並びに専門職に従事する者に対する教育支援を行うほか、地域住民の防災・医療・福祉の向上に資することを目的とする。 (2) 所在地：青森県弘前市大字扇町二丁目5番 (3) 設置年月：令和4年4月 (4) 規模：面積 42.23㎡ 所員 9人（本務 1人、兼務8人）</p>	
----------------	---	--

別記様式第2号（その2の1）

教育課程等の概要														
(地域健康支援学研究科地域健康支援学専攻 修士課程)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
共通科目	地域分析学	1前	2			○			3	1				オムニバス
	医療情報技術論	1前	2			○			1					兼1 オムニバス
	在宅ケア論	1前	2			○			1					兼3 オムニバス
	地域健康支援教育学特論	1前		2		○								兼1
	施設管理運営方法論	1後		2		○			2					兼1 オムニバス・共同(一部)
	地域健康支援倫理学	1後	2			○			2					オムニバス
	在宅ケア論演習	1後		1			○		3					兼1 オムニバス
	小計(7科目)	—	8	5	0	—			10	1	0	0	0	兼6 —
専門科目	地域生活学特論	1前		2		○			3					兼1 オムニバス
	地域精神保健学特論	1前		2		○			2					兼1 オムニバス
	生活機能支援学特論	1前		2		○			1		1			オムニバス
	言語聴覚学特論	1前		2		○			2		1			オムニバス
	生涯発達支援論	1前		2		○			2	1	1			オムニバス
	終末期ケア論	1後		2		○			1					
	保健教育学特論	1後		2		○			2		2			オムニバス・共同(一部)
	地域防災支援論	1後		2		○			3			1		兼1 オムニバス・共同(一部)
	地域防災支援論演習	2前		1			○		3			1		兼1 オムニバス・共同(一部)
	地域リハビリテーション学特論	1後		2		○			3					オムニバス
	言語聴覚学特論演習	1後		1			○		2		1			オムニバス
	認知症ケア学特論	1後		2		○			1		1			オムニバス
	終末期ケア論演習	2前		1			○		1					
小計(13科目)	—	0	23	0	—			16	1	5	1	0	兼3 —	
研究科目	地域健康支援学基礎特論	1後	1			○			16	1	2			
	地域健康支援学特別演習	2通	1				○		16	1	2			
	地域健康支援学特別研究	2通	8			○			16	1	2			
	小計(3科目)	—	10	0	0	—			16	1	2	0	0	兼0 —
合計(23科目)		—	18	28	0	—			16	1	5	1	0	兼8 —
学位又は称号	修士(地域健康支援学)		学位又は学科の分野			保健衛生学関係(看護学関係) 保健衛生学関係(リハビリテーション関係)								
卒業要件及び履修方法						授業期間等								
共通科目から必修科目8単位及び選択科目2単位以上、専門科目から選択科目10単位以上、研究科目から必修科目10単位、計30単位以上修得すること。						1学年の学期区分				2学期				
						1学期の授業期間				15週				
						1時限の授業時間				90分				

授 業 科 目 の 概 要			
(地域健康支援学研究科地域健康支援学専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通 科目	地域分析学	<p>(概要) 少子高齢化にともなう地域の保健・医療分野の現状を把握し、派生する影響要因を確認・予測するとともに、地域のがん・生活習慣病・感染症・フレイルなどに対する検診受診行動の影響や中枢性疾患及び内部疾患、運動器疾患患者の在宅生活の現状を把握し、潜在する健康課題を示し、新たな方策を考察する。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(3 木田 和幸／3回) 各種人口統計や保健統計から得られる情報を基に、少子高齢化の地域の現状を国等との比較から把握し地域の特性を把握する。さらに派生する影響要因について確認・予測することによって現状課題を把握し、潜在する課題を提示する。</p> <p>(① 松尾 泉／4回) 地域の健康は、住民のヘルスリテラシーや健康統制感に支えられた日々の暮らしの中から生まれる。特に地域の主たる健康課題（がん・生活習慣病・感染症・フレイルなど）に対する検診受診行動の影響は大きい。二次予防事業の現状から地域を分析し、新たな方策を展望する。</p> <p>(12 藤原 健一／4回) 中枢性疾患及び内部疾患患者の在宅生活について、三次予防の観点から地域の現状を国等との比較から把握し、地域の特性を理解する。さらに、三次予防に加えて生活の質の維持・向上の観点から日常の諸活動や社会参加状況を確認・検討し、潜在する課題を明らかにするための分析方法を修得する。</p> <p>(13 佐藤彰博／4回) 運動器疾患について、三次予防の観点から地域の現状を国等との比較から把握し、地域の特性を理解する。さらに、運動器疾患を生じさせる現存</p>	オムニバス方式

		<p>する要因について確認・理解すると共に、潜在的課題を明らかにする方法論や分析方法を修得する。</p>	
	<p>医療情報技術論</p>	<p>(概要) 授業の目標は、住み慣れた地域で生活していけるように地域と医療機関等との情報通信連携について学び、医療分野における情報化の現状ならびに情報を安全・有効に取り扱うために必要な諸規定について理解することである。授業では医療分野における情報化の現状ならびに情報を安全・有効に取り扱うために、ICT 機器の取り扱いだけでなく、得られたデータから新たな価値を見いだすデータサイエンスの基礎についても学ぶ。さらに、医療情報管理に関わる法令、管理技術、臨床における遠隔医療の実際から新たな医療技術である仮想化技術 (VR/AR/MR) の医療応用まで幅広い視点で学修する。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全 15 回)</p> <p>(13 佐藤 彰博/2 回)</p> <p>近年、リハビリテーション領域においても ICT を利用した取り組みが増えています。ICT を活用した在宅での遠隔リハビリテーション、情報端末を使った疾患のスクリーニングに関する取り組みやリハビリテーション評価、活動量計などによるモニタリング、リハビリテーション介入に関する実践事例を紹介しながら今後の ICT の活用について学びます。</p> <p>(28 野坂 大喜/13 回)</p> <p>医療情報の理解においては ICT 機器の取り扱いだけでなく、得られたデータを整理・加工して新たな価値を見いだすといったアプローチが必要となります。このようなアプローチをデータサイエンスといい、医療情報技術の基礎において学びます。</p> <p>医療情報の利活用においては ELSI (倫理的-法的-社会的-課題) の側面があり、個人に不利益を生じずに公衆衛生に寄与できるような配慮が欠かせません。医療情報管理においては情報管理に関わる法令と管理技術などについて学んでいきます。</p> <p>近年医療情報の新たな利活用方法として医用人工知能 (AI) や遠隔医療が臨床応用化に至っています。これらの最先端医療情報処理技術について学ぶほか、さらなる発展形態として仮想化技術</p>	<p>オムニバス方式</p>

	(VR/AR/MR)の医療応用について学びます。	
在宅ケア論	<p>(概要) 在宅医療・緩和ケア、障害を持つ対象者への歯科訪問診療の現状について理解を深める。また、地域にて疾病や障害を持ちながら生活する人々の生活の実態を把握するとともに、提供されているケアおよび実践方法から課題抽出し支援方法について検討する。在宅ケアを支える多職種連携の基本や実施上の課題について学び、医療依存度の高い在宅療養者の事例をもとに具体的な連携方法を探る。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(5 福岡 裕美子／5回) 在宅ケアと対象となる人々について理解を深める。医療依存度の高い在宅療養者の現状と課題について事例を用い検討し、多職種による支援方法を探る。さらに在宅ケアの対象となる人のAdvance Care Planning(ACP)と個人の尊厳について考え、家族の関わりと支援について検討する。</p> <p>(27 小山 俊朗／4回) 地域医療における障害を持つ対象者への歯科訪問診療の位置づけ、多職種連携における歯科口腔保健活動について学ぶ。また、各対象者の身体的・精神的特徴への配慮に基づいた口腔衛生管理・口腔ケアの実践について、具体的事例を提示して概説する。</p> <p>(29 川口徹／3回) 高齢障がい者の通所施設、あるいは訪問サービスをつかいながらの生活実態把握、課題抽出、支援方法を涵養する。同じように、脊髄小脳変性症・多系統萎縮症などの神経難病患者の生活実態把握、課題抽出、支援方法を涵養する。</p> <p>(30 坂本 祥一／3回) 地域にて疾病や障害を持ちながら療養する人、緩和ケアを受ける人の療養生活の実態を把握し、課題の抽出から具体的な支援方法を探求する。在宅での療養生活を支えるための多職種およびその連携方法を概説する。</p>	オムニバス方式
地域健康支援教育学特論	(概要) 健康を支援するためには様々な健康問題に対する予防や解決法について人々が自ら必要	

		<p>な知識を獲得して、必要な意思決定と問題解決に向けた積極的行動ができるよう支援する必要がある。そのためには健康教育が重要であり、教育の基本を知る必要がある。本科目では、教育とは何か、学習とは何か、行動論的・認知論的・状況論的学習理論を含む教育の基本的な立場をふまえて、学習指導法、学習動機づけの基本的理論、個人差に応じた教育、および教育評価などについて基本的事項を学ぶとともに、教育実践への具体的な適用について考える。授業形態は講義である。</p>	
	<p>施設管理運営方法論</p>	<p>(概要) 地域ケア施設におけるケアの質の向上のための人材育成ならびに施設の健全な管理、運営方法について学ぶ。具体的には、人材育成に必要な学習理論やキャリア理論、ケア実践における倫理的課題およびリスク、組織マネジメントに関する概念・理論、経営状態の把握・評価、事業計画に沿った経営評価の考え方等について学ぶ。授業の終盤には、施設管理運営やケア管理について、それぞれの院生の立場から考えた課題について発表と意見交換を行う。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(10 工藤 うみ/7回) 地域包括ケアシステムとケアサービスの提供体制、ケア実践における倫理的課題およびリスクについて学ぶ。また、チームマネジメントに必要なリーダーシップやメンバーシップ、ファシリテーションについて、人材育成に必要な学習理論やキャリア理論について学ぶ。それらを前提として、高齢者ケア施設におけるケア管理について実践例に基づき考察する。</p> <p>(11 土澤 健一/3回) 組織マネジメントに関する概念・理論、経営状態の把握・評価、事業計画の立て方、事業計画に沿った経営評価の考え方について学ぶ。また、個々の能力の評価と育成、人的資源を活かした組織づくりについて学ぶ。</p> <p>(24 千葉 美穂/4回) 訪問看護ステーションにおける経理・経営の実際を通して、労働法規からハラスメント防止に関する内容等、労務管理の基礎的な知識について学ぶ。また、ケア管理については、訪問看護の実践からケアサービス評価の視点と方法、サービスの改善についても検討する。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>

		(10 工藤 うみ・24 千葉 美穂/1回) (共同) 施設管理運営やケア管理について、それぞれの院生の立場から考えた課題について発表と意見交換を行う。	
地域健康支援倫理学	<p>(概要) 地域で生活する人々の健康支援において生じてくる倫理的問題等に注目し、問題の分類方法、4分割法やナラティブアプローチなどの検討方法を用いて、倫理的問題解決プロセスを学ぶ。対象となる生活者の尊厳を守るため、生命倫理、医療倫理、看護倫理の基本的な知識をもとに、倫理的意思決定、生活環境における倫理について理解するとともに、「病とともに生活する人々」や「人生の最期を生きる人々」が抱える倫理的問題について、事例に基づき検討する。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(8 工藤 千賀子/5回) 病をもちながら地域で生活する人々の倫理的問題を理解し、解決するためのプロセスについて学ぶ。具体的には、神経難病等の模擬事例を設定し、4分割法による倫理的推論の実際を理解する。</p> <p>(9 川崎 くみ子/10回) 地域健康支援倫理学の概要を理解し、地域で生活する人々の健康にまつわる倫理的問題を解決するためのプロセスを学ぶ。具体的には、「生活環境に置ける倫理的問題」として災害や感染について、「人生の最後に生じてくる倫理的問題」として高齢者の生活、緩和ケア等に注目した事例をもとに、4分割法やトンプソン意思決定10段階モデルを用いて倫理的問題検討の実際を理解する。</p>	オムニバス方式	
在宅ケア論演習	<p>(概要) 在宅ケア論で学んだ知識を基盤とし、疾患特性を考慮した在宅リハビリテーション、言語聴覚障害児・者の意思疎通のためのコミュニケーション機器の導入、医療的ケアが必要な在宅療養者や認知症を有する人が持てる力が発揮できるケア、がん終末期の在宅療養における訪問看護実践について、多職種連携の視点から具体的な支援方法について検討する。さらに地域包括ケアとチームアプローチの実際および必要性について学ぶ。授業形態は演習である。</p>	オムニバス方式	

		<p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(5 福岡 裕美子／9回) 地域包括ケアとチームアプローチの実際および必要性について理解する。医療的ケアが必要な在宅療養者や認知症を有する人が持てる力を十分発揮し、住み慣れた地域で暮らしていくための支援方法を修得する。</p> <p>(15 小山内 筆子／2回) 在宅における言語・コミュニケーション障害児・者への支援について理解を深め、多職種連携の視点から支援方法を検討する。また、事例を通して利用目的や疾患に応じたコミュニケーション支援機器について具体的に学ぶ。</p> <p>(17 成田 秀美／2回) 疾患特性を考慮した在宅リハビリテーションについて、作業療法士等の専門性を発揮した展開方法、さらに多職種と協働したさまざまな角度からの生活支援のあり方を学ぶ。</p> <p>(24 千葉 美穂／2回) がん終末期の在宅療養に関するケアの実際について、訪問看護実践における事例を用いながら具体的な支援方法について検討する。在宅における緩和ケアについての理解を深めるとともに、穏やかな最期を迎えるための多職種との連携について検討する。</p>	
専門科目	地域生活学特論	<p>(概要) 高齢化率の高い地域住民の現代感染症のトレンド、地域住民の脅威であり続ける結核について理解した上で感染予防対策などや、ライフステージに応じた歯科口腔保健対策の基本的な考え方や取り組みや、女性のライフステージに応じた排泄機能の理解を深めて排泄トラブルの影響について現状を明らかにし予防対策等を検討するとともに、健康日本 21 の項目に基づいて生活習慣の現状を把握し健康増進に向けての方策等を学ぶ。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(3 木田 和幸／4回) 高齢化率の高い地域の特性を把握するとともに、地域生活学特論の目的やその内容について概説する。 国民健康・栄養調査や健康日本 21 の項目に基</p>	オムニバス方式

		<p>づいて地域の生活習慣の現状を把握するとともに、全国のデータと比較をしながら地域の課題を探索し、健康増進に向けての方策等を学ぶ。</p> <p>(6 中根 明夫／5回) 新型コロナウイルス感染症、新型インフルエンザを例に現代感染症のトレンド、地域住民の脅威であり続ける結核について理解した上で、日常生活、非常時における感染予防対策、生活習慣の改善やワクチンによる免疫学的感染予防対策など地域住民の感染予防対策を包括的に修得する。</p> <p>(9 川崎 くみ子／3回) 女性のライフステージに応じた排泄機能への理解を深め、日常生活における排泄（排尿・排便）トラブルの影響について、中高年女性・若年女性の現状を明らかにし、予防対策等を検討する。</p> <p>(27 小山 俊朗／3回) 歯・口腔の健康にかかわる社会の仕組みを理解し、地域社会におけるライフステージに応じた歯科口腔保健対策の基本的な考え方や取り組みについて概説する。また、配慮を要する対象者への歯科保健活動、大規模災害時の歯科保健活動などについても提示する。</p>	
	<p>地域精神保健学特論</p>	<p>(概要) わが国における精神障害者の医療・保健・福祉の歴史的変遷とライフサイクルにおける精神疾患の特徴を学び理解を深め、精神保健の意義を理解する。また、少子・高齢化や核家族化、慢性疾患の増加という社会状況の中、地域で生活する個人や集団の精神保健を支えるための社会保障制度と多職種連携の意義を解説し、対象者が安心して生活するための在宅ケア・ニーズを明らかにし、かつ対応するための地域精神保健活動を実践例から学ぶ。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(11 土澤 健一／4回) 精神保健とは何かを考えながら、精神医療制度や社会状況さらには精神障害者の理解を深め、地域における社会資源の活用を踏まえた生活の自立と社会参加の意義を学ぶ。ここでは、精神的健康の保持と増進についての理解を深め、我が国における精神保健および精神科医療における歴史的背景について人権への配慮や関連する法規・制度を含めて概観するとともに、我が国の精神保健</p>	<p>オムニバス方式</p>

		<p>の現状について理解を深め、予防精神医学の意義について学ぶ。</p> <p>(17 成田 秀美/6回)</p> <p>地域における精神保健は、対象者の健康問題や生活問題に対し、多様な活動の場と様々な関係性から促進され、組織的に解決していかなければならない。その展開に向けた活動の場そして活動方法の特性について、また関連職種等との連携や協働の重要性を学ぶ。さらに実践例を通し、対象者のライフサイクルに対応した自己決定や地域の力を引き出す専門性の能力を養い、地域精神保健の課題と今後の方向性についても検討する。</p> <p>(31 小山内 隆生/5回)</p> <p>ライフサイクル(一生涯)における精神機能は、発達に伴う変化と社会環境の相互作用の影響を受ける。現代社会は都市化と過疎化の2極化が進むとともにメタバースなどの仮想空間が登場し、複雑さが増している。このような状況で地域生活を送っている現代人の思春期・青年期・成人期・初老期の各ステージにおける課題とそれに関係する精神保健上の問題について理解を深める。</p>	
	<p>生活機能支援学特論</p>	<p>(概要) 授業の目標は、地域に暮らす人々の生活に障害を及ぼす要因の把握をとおして、運動器疾患を例として生活障害についての理解を深めること、疾患の予防・早期発見・生活の障害を改善するための支援方策を修得することである。授業では将来の生活に障害を及ぼす疾患を生じさせる要因や地域に暮らす患者の生活に障害を及ぼしている要因を把握するために先行研究を概観する。また、先行研究を含めて要因研究のための研究デザインや分析方法についても理解を深める。その上で、疾患の予防、早期発見、障害を改善するための方策について学ぶ。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(13 佐藤 彰博/10回)</p> <p>フレイルや運動器疾患を対象とした実際の要因研究を概観しながら、地域に暮らす人々の生活に障害を及ぼす要因を把握してもらおう。さらに、要因研究のための研究デザインや分析方法についても理解を深める。その上で、疾患の予防、早期発見、生活の障害を改善するための方策を学ぶ。</p>	<p>オムニバス方式</p>

	<p>(21 千葉 さおり／5回)</p> <p>変形性関節症を代表とした骨関節疾患や上肢の運動器疾患、炎症性疾患についての要因研究を概観しながら、地域に暮らす人々の生活に及ぼす障害とその要因について理解を深める。また、疾患の予防、障害を改善するための方策を学ぶ。</p>	
言語聴覚学特論	<p>(概要) 言語障害・コミュニケーション障害・嚥下障害における評価及び支援方法、最新の臨床研究の動向について学び、地域で生活する言語障害・コミュニケーション障害・嚥下障害の人々の現状と課題について理解を深める。また、切れ目のないサービスや社会的変化に対応するために必要な多職種連携の基本や実施上の課題について学ぶ。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(12 藤原 健一／5回)</p> <p>口腔機能は、日常生活における食事動作やコミュニケーションに関わる重要な機能である。特に肺炎入院患者における誤嚥性肺炎の割合は高齢者では高く、嚥下障害に対する対策が必要である。ここでは、嚥下機能の理解と加齢による変化、嚥下障害の評価と治療、嚥下障害の予防について現状と課題について理解を深める。</p> <p>(15 小山内 筆子／5回)</p> <p>コミュニケーション障害である吃音の評価と支援方法、最新の吃音臨床研究の動向を学ぶ。吃音は時間の経過と共に進展していくことが言われていることから、吃音をもちながら地域で生活する人々の現状を把握し、各ラフステージで必要とされる多職種連携の課題についても理解を深める。</p> <p>(19 浅田 一彦／5回)</p> <p>失語症や高次脳機能障害をもちながら地域で生活する人々の現状を把握し、多職種連携の基本や実施上の課題について学ぶ。具体的には失語・高次脳機能障害領域の臨床研究の動向を踏まえつつ、地域における現状把握と課題について理解を深める。</p>	オムニバス方式
生涯発達支援論	<p>(概要) 人間は生涯にわたって発達する存在と捉え、地域で生活する個人・家族・集団のライフス</p>	オムニバス方式

		<p>ステージについて健康科学の理論を用いて理解する。個人・家族・集団に重層的に生じる、就学・子育て・仕事・障がいや老いなどの事象に対し、生活機能分類を用いて分析・課題抽出をおこなう。地域に顕在する健康課題に対し、住民が主体的に取り組めるよう、ウェルネスアプローチを用いた包括的生涯発達支援策を考察する。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(2 小玉 有子/3回) 人間の発達について、認知心理学・発達心理学の理論を基に理解を深める。また、愛着障害・発達障害が各ライフステージに及ぼす影響を理解するとともに、対象理解のためのアセスメントの方法や、学校臨床や職場での課題解決のための介入・支援方法を修得する。</p> <p>(① 松尾 泉/6回) 人間は生涯発達する存在である。誕生から乳幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期の各期の特徴を理解し、生涯発達の視点から対象の生活課題をアセスメントする。また、各期に必要なヘルスリテラシー向上を目的とする健康教育など生涯発達支援活動の方策を考察する。</p> <p>(15 小山内 筆子/4回) 言語発達障害における言語・コミュニケーションの特徴や支援方法の実際を学び、生涯発達支援の観点から各ライフステージにおける発達支援・家族支援・周囲への支援について事例を通して学修する。</p> <p>(18 高瀬 園子/2回) 妊娠出産育児期の家族の発達課題を理解し、生殖補助医療における諸問題や社会構造の変化に伴う育児期の家族の発達課題を理解し、その支援方法の実際について学ぶ。</p>	
	<p>終末期ケア論</p>	<p>(概要) 終末期におけるケアの特徴や個人の尊厳を重視した看取りを家族の関わりも含めて多職種連携の視点から学ぶ。意思決定支援、ACPとナラティブケア、チームアプローチなど終末期ケアの基盤となる知識について学んだ上で、終末期までのケア計画、症状マネジメントと終末期予後予測、死が近づいた時のケア、死亡時のケアの方法について学ぶ。また、遺された者へのグリーフ</p>	

		<p>ケア、死と向き合い、穏やかに受け止めるための方法について学ぶ。授業形態は講義である。</p>	
	<p>保健教育学特論</p>	<p>(概要) 個人・集団を対象とした地域における健康課題について、その予防や健康増進のための効果的な指導方法の実践について学ぶ。具体的には健康課題に応じた指導方法と教材の意義等の基本的知識を修得し、さらに生活習慣と密接に関連する肥満・痩せ、喫煙等の模擬事例を設定し行動変容に向けた指導案を作成する。また、動機づけの視点に着目した持続可能な親子支援の実際やコーチング理論にもとづく対人支援方法についても学修する。また指導方法においては地域特有の方言にも着目する。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 西沢 義子/5回) 地域で生活する人々の特徴について理解するとともに、それぞれの対象者の抱える健康課題に応じた効果的な指導方法と教材の意義について学ぶ。具体的には生活習慣に起因する肥満、痩せ等の模擬事例を設定し、指導案の作成と効果的な教材の作成ならびに健康増進を目指した指導の実際と留意事項について学ぶ。</p> <p>(8 工藤 千賀子/4回) 様々な健康問題に関連する喫煙行動について理解し、各年代に応じた喫煙防止・禁煙教育について学ぶ。具体的には、模擬事例を設定し、禁煙教育指導案を作成する。また、保健教育における地域特有の方言の意義を理解し、方言を用いる効果について考察する。</p> <p>(18 高瀬 園子/3回) 小児期各期の特徴と健康課題を理解し、課題解決に向けた親子支援について学ぶ。具体的には、小児の成長発達と地域における小児の健康と親世代の特徴を理解し、動機づけの視点に着目しながら小児の発達年齢に応じた持続可能な親子支援の実際について学ぶ。</p> <p>(22 奥山 淳子/2回) 言語聴覚領域に関わる課題を理解するとともに、コーチング理論にもとづく対人支援方法について学ぶ。地域社会における医療コミュニケーションを活用した指導方法を修得する。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>

		<p>(1 西沢 義子・8 工藤 千賀子・18 高瀬 園子・22 奥山 淳子／1回) (共同)</p> <p>院生の立場から地域における個人・集団を対象とした指導事例を設定し、発表・検討する。</p>	
	<p>地域防災支援論</p>	<p>(概要) 地域防災の基本について学ぶとともに、一般的な災害をはじめ青森県特有の課題である原子力災害も含めた災害発生時の地域住民への実践的な支援方法を学ぶ。具体的には災害時の健康危機管理の視点から保健・医療・福祉の連携、地域防災の基本として自助・共助・協働の原則、多数傷病者対応、災害時の救急看護について学修する。さらに放射線の基礎知識や原子力発電所事故事例と環境への影響ならびに地域住民への中長期的な支援について考察する。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 西沢 義子／2回)</p> <p>原子力災害が発生した際の地域住民の不安と健康課題について、実際の事例に基づき学修する。また、地域住民への身体的、精神的、社会的課題への中長期的な支援について事例に基づき考察する。</p> <p>(7 板垣 喜代子／4回)</p> <p>災害の基礎的な知識と災害時の健康課題を学び、災害時の健康危機管理の視点から保健・医療・福祉の連携および災害発生時から復旧・復興期まで被災者と救援者に必要な支援について修得する。</p> <p>(16 細川 洋一郎／3回)</p> <p>放射線の基礎知識として自然放射線、放射線の種類と特徴、放射線被ばくとリスクについて学ぶ。また、過去の原子力発電所事故事例と環境への影響について理解するとともに放射線影響の種類と放射線防護体系についても修得する。</p> <p>(② 山崎 千鶴／2回)</p> <p>災害時に想定される緊急事態に対応するために必要な一次救命処置や救命率向上に向けた救急救命士や医師との連携について学ぶ。また、災害時の救急看護として緊急度の高い症状に対するアセスメントならびに応急手当の基本について修得する。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>

		<p>(26 立岡 伸章/3回)</p> <p>地域防災の基本として自助・共助・協働の原則、消防団・自主防災組織等について学ぶ。また、災害時の対策として多数傷病者対応、CSCATTT、現場救護所とDMAT、緊急消防援助隊、警察、自衛隊の連携、広域医療搬送等について修得する。</p> <p>(1 西沢 義子・7 板垣 喜代子・16 細川 洋一郎・② 山崎 千鶴・26 立岡 伸章/1回) (共同)</p> <p>自然災害や原子力災害発生時の健康課題についてそれぞれの院生の立場から考えた地域の健康課題について発表・検討する。</p>	
	<p>地域防災支援論演習</p>	<p>(概要) 地域防災支援論で学んだ知識を基盤とし、災害発生時における支援方法について模擬事例を通して実践的に学ぶ。具体的には避難所運営計画演習、被災者訪問演習としてアウトリーチやストレス対策等について学修する。災害発生時における災害現場や病院・救急外来でのトリアージ演習をはじめ救急看護演習においては緊急時の応急手当等の実際を学修する。さらに放射線の測定・観察や放射線防護対策、被ばく医療の実際ならびに放射線リスクコミュニケーションについて学修する。授業形態は演習である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 西沢 義子/2回)</p> <p>原子力災害発生地域の住民が経験した事例を取り上げ、住民への関わり方の基本と留意事項について学ぶ。具体的には避難所や仮設住宅での課題等について放射線リスクコミュニケーションの視点から学修する。</p> <p>(7 板垣 喜代子/4回)</p> <p>避難所運営計画演習では日常生活に必須のトイレ、食事、ベッドや健康維持に対する支援、長期化することにより発生する感染症・深部静脈血栓症予防、災害時要配慮者、プライバシー保護、多様性の配慮などの実際について学ぶ。被災者訪問演習ではアウトリーチ(被災者の個別訪問)、健康相談、心のケア、被災者(子ども含む)ストレス対策、救援者のPTSD予防についても学ぶ。</p> <p>(16 細川 洋一郎/3回)</p> <p>放射線の測定・観察では、身近な物の放射線計測と簡易霧箱を用いた放射線の観察をする。放射</p>	<p>オムニバス方式・共同(一部)</p>

		<p>線防護では外部被ばくに対する放射線防護対策について教育用キットを用いて学ぶ。被ばく医療の実際では原子力発電所事故発生時の被ばく医療の実際について学ぶ。</p> <p>(② 山崎 千鶴/2回)</p> <p>災害時の救急看護演習では、三角巾を用いた応急手当や骨折時の固定ならびに多量出血時の止血法について学ぶ。また、緊急度の高い事態を想定し、成人・小児の気道確保やBLS（一次救命処置）についても修得する。</p> <p>(26 立岡伸章/3回)</p> <p>トリアージ演習として、災害現場でのトリアージ、災害医療の組織体制と医療支援におけるCSCATTT（指揮と連携、安全、情報伝達、評価、トリアージ、治療、搬送）について学ぶ。また病院・救急外来でのトリアージや広域傷病者搬送の実際について学ぶ。</p> <p>(1 西沢 義子・7 板垣 喜代子・16 細川 洋一郎・② 山崎 千鶴・26 立岡 伸章/1回)（共同）</p> <p>課題検討会として地域特性を考慮した防災計画について、それぞれの立場から発表・検討する。</p>	
地域リハビリテーション学特論		<p>(概要) 地域におけるリハビリテーションは、心身の障害やフレイル等による活動制限や参加制約に対して、住み慣れた地域で、生き活きとした生活が送れるように、各種制度の利用、地域包括支援センターや行政、医療や介護、地域住民を含めて地域資源を活用し、生活を支援していく必要がある。地域リハビリテーション学特論では地域における活動や参加・介護予防・QOLの視点から、地域におけるリハビリテーションの実践的な支援について学ぶ。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(12 藤原 健一/5回)</p> <p>地域リハビリテーション学特論では、高齢者や障害のある人の地域リハビリテーションサービスについて、作業療法士等の専門性を発揮した展開方法、さらに多職種との協働も含めた様々な角度からの生活支援のあり方を学ぶ。ここでは、地域リハビリテーションの概念、関連する制度・政策、リスクマネジメント、プロセスについて理解を深める。また、地域ケア会議の事例を通じて多</p>	オムニバス方式

		<p>職種連携による生活支援について理解を深める。</p> <p>(14 岩間 孝暢／5回)</p> <p>地域リハビリテーション学特論では、高齢者や障害のある人の地域リハビリテーションサービスについて、作業療法士等の専門性を発揮した展開方法、さらに多職種との協働も含めた様々な角度からの生活支援のあり方を学ぶ。ここでは、地域リハビリテーションの展開について、子どもから高齢者までのライフサイクルにおける生活障害について多職種の役割と連携、環境調整も含めた支援の現状と課題を理解する。</p> <p>(17 成田 秀美／5回)</p> <p>地域リハビリテーション学特論では、高齢者や障害のある人の地域リハビリテーションサービスについて、作業療法士等の専門性を発揮した展開方法、さらに多職種との協働も含めた様々な角度からの生活支援のあり方を学ぶ。ここでは、地域リハビリテーションの専門性を発揮した展開について、身体障害領域、精神障害領域（高次脳機能障害を含む）、高齢障害領域の各領域に対する地域リハビリテーションの実践について、多職種の役割と連携、環境調整も含めた生活支援の現状と課題を理解する。</p>	
	<p>言語聴覚学特論演習</p>	<p>(概要) 言語聴覚学特論で学んだ知識を基盤とし、地域における言語障害・コミュニケーション障害・嚥下障害の評価・支援方法における臨床での課題を挙げ、課題解決のために必要とされる具体的な支援方法について事例を通して実践的に学ぶ。また、事例を通して多職種連携の視点から言語障害・コミュニケーション障害・嚥下障害に対する健康課題について、それぞれの院生の立場から考えた課題を発表・検討し、より深い知識を修得する。授業形態は演習である。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(12 藤原 健一／5回)</p> <p>地域包括ケアシステムに代表されるように、健康問題を抱えている人や健康に問題を生じる可能性のある人への生活支援は地域住民も含めた多職種連携による支援が重要となる。ここでは、嚥下障害に対する支援の現状から課題の所在を明らかにし、その課題解決に向けた生活支援を検討する。</p>	<p>オムニバス方式</p>

	<p>(15 小山内 筆子/5回)</p> <p>吃音・流暢性障害における評価・治療方法の演習及び文献抄読、事例検討・発表・討議を行う。さらに多職種連携の視点から吃音・流暢性障害に対する具体的な支援方法について事例を通して検討する。</p> <p>(19 浅田 一彦/5回)</p> <p>多職種連携の視点から失語症や高次脳機能障害に対する具体的な支援方法について事例を通して検討する。授業では失語・高次脳機能障害における評価・認知リハ関連の演習及び文献抄読、事例検討・発表・討議を行う。</p>	
認知症ケア学特論	<p>(概要) 認知症高齢者に関する研究動向および認知症の人を取り巻く社会とその動向から、現代社会における認知症ケアの課題を概観し、認知症を抱えながら地域で生きる高齢者・家族のアセスメントやケアマネジメントに必要な知識・技術について学ぶ。認知症施策や地域包括ケアの概念から、認知症を有し住み慣れた地域で暮らすために、認知症の人の症状や環境に応じたケアを提供する方法や多職種で支援する方法を探求する。授業形態は講義である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(5 福岡 裕美子/11回)</p> <p>認知症の人を取り巻く社会とその動向をとらえ、認知症ケアの理念や認知症の人のアセスメント及びケアマネジメントについて学ぶ。認知症施策や地域包括ケアの概念から、認知症を有し住み慣れた地域で暮らすために、認知症の人の症状や環境に応じたケアを提供する方法や多職種で支援する方法を探求する。</p> <p>(20 山内 真紀子/4回)</p> <p>認知症高齢者に関する研究動向から、現代社会における認知症ケアの課題を把握する。認知症症状(中核症状やBPSD)から、認知症高齢者のアセスメントを学ぶ。</p> <p>認知症に関する統計資料から、認知症ケアにおよぼす課題を捉え、認知症高齢者を介護する家族に必要なアセスメントの視点を学ぶ。</p>	オムニバス方式
終末期ケア論演習	<p>(概要) 終末期ケア論の知識を基盤とし、看取りの具体的な方法について実践例を通して学ぶ。自</p>	

		<p>宅での看取りのケースと高齢者ケア施設での看取りのケース、それぞれについて書かれた書籍を1冊ずつテキストとして使用し、受講者それぞれの解釈と気づき、経験などを共有するグループワークを通して、さまざまな環境下でありながらも穏やかさとその人らしさを保ちながら終末期を過ごすための看取りの具体的な方法、死に向き合う姿勢や困難を乗り越える方法を学ぶ。授業形態は演習である。</p>	
<p>研究科目</p>	<p>地域健康支援学基礎特論</p>	<p>(概要)</p> <p>個人や集団を対象とした地域における健康課題を多方面から探求するとともに、課題解決の具体的な方法について検討する。健康課題に関しては各専門分野における特性を把握しながら文献検討を行い、近年の動向を踏まえて設定する。研究の基礎となる研究計画書作成の基本、量的研究や質的研究などの研究デザイン・研究手法の特性、研究手法に適したデータの解析方法並びに研究倫理や利益相反等の研究遂行の基本について学修する。授業形態は講義である。</p> <p>(1 西沢 義子)</p> <p>地域における個人や集団を対象とした健康課題を多方面から探求する。健康課題に関連する先行研究に関しては、DB等を用いた文献検索の方法について学ぶとともにクリティークしながら文献検討を行う。また、研究デザインの種類や研究する上での基本である倫理的配慮や利益相反について学ぶ。</p> <p>さらに研究課題に基づき概念枠組みの構築と変数の明確化について学び、研究計画書の作成につなげる。また基本的なデータの集計や分析方法の概要について学ぶとともに、研究成果の発表方法に関してはスライド・抄録の作成をはじめ国内外での学会発表の基礎について学修する。</p> <p>(2 小玉 有子)</p> <p>自己の研究課題を明確にするために、関連文献を検索し、クリティークの視点をもって文献を読み、地域の研究課題を多方面から探求する。研究プロセスを学び、自己の研究課題を解決するための方法を理解し、研究計画作成方法を修得する。また、研究倫理配慮や利益相反についても学ぶ。</p> <p>(3 木田 和幸)</p> <p>研究テーマに関連した地域の健康課題を多方面から探索するとともに、課題解決に向けた具体</p>	

		<p>的な手法とその実現可能性を探り、研究の実効性について考察する。</p> <p>(① 松尾 泉)</p> <p>地域における健康課題を多方面から探求するとともに、課題解決の具体的な方法について検討する。地域における健康課題の中から自己が取り組みたい健康問題を抽出し、多方面からの文献検索およびクリティークを重ね、事故が研究として取り組む課題を明確化する。また、課題解決のための研究デザインや研究方法については、自己の研究課題に関連ある文献を探索しながら具体化し、適切な方法を決定するまでの過程を学ぶ。</p> <p>(5 福岡 裕美子)</p> <p>自己の研究課題を明確化するために、関連文献を検索・クリティークし、地域における健康課題を多方面から探求する。研究プロセスを学び研究課題を解決するための一連の方法を理解する。明確化した自己の研究課題に適した研究方法を選択するために質的・量的の具体的な研究方法を学ぶ。また、研究する上での基本である倫理的配慮や利益相反について学ぶ。</p> <p>(6 中根 明夫)</p> <p>新型コロナウイルス感染症、インフルエンザの流行や地域住民の脅威であり続ける結核など感染症が大きな問題となっている。そこで、日常生活・非常時における感染予防対策、生活習慣の改善、ワクチンによる免疫学的感染予防対策など、地域住民の感染予防対策の改善・支援、さらに、病院、施設、在宅における感染予防対策の改善・支援を促進する研究を目指す。そのための情報収集や研究を行うための基礎となる知識・手法等を修得する。</p> <p>(7 板垣 喜代子)</p> <p>個人・家族・職場・学校など地域集団を対象とした健康支援にかかわる課題を設定し、関連科目で学んだ知識を基盤として、研究者としての基礎的態度を学ぶ。</p> <p>対象となる地域住民への関わりを通じて、当事者の視点に立った健康課題を発見し、対象者一人一人が健康づくりに取り組むための研究活動の実際について学ぶ。</p> <p>(8 工藤 千賀子)</p> <p>生活習慣病を有する個人や所属する集団・地域の健康課題を探求し、明確にする。その健康課題と、そこに潜む法則性を明らかにするための科学</p>	
--	--	--	--

		<p>的アプローチについて学び、自己の研究課題への適用方法の基礎を学ぶ。様々なデータ収集方法、および研究に関する倫理的配慮についても学び、自己の研究課題を解決するためのアプローチの方法を明確にする。</p> <p>(9 川崎 くみ子)</p> <p>地域における健康課題を多方面から探求し、課題解決に向けた基本的な研究方法とそのプロセスを学習する。具体的には、地域の健康課題に注目した文献検索とクリティークを行い、研究の中心となるリサーチクエスト(研究課題)について理解を深める。</p> <p>また、自己の研究を進めるにあたって必要となる研究計画書作成や研究倫理・倫理審査申請について学ぶ。以上の学びを生かし、自己の研究に関連の深い文献のクリティークを行い研究課題を明確化するとともに、その研究課題に適した研究方法を検討する。</p> <p>(10 工藤 うみ)</p> <p>地域における研究課題を多方面から探求するとともに、課題解決の具体的な方法について検討する。地域における健康課題の中から自己が取り組みたい健康課題を抽出し、多方面からの文献検索および文献クリティークを重ね、自己が研究として取り組む課題を明確化する。また、課題解決のための研究デザインや研究方法については、自己の研究課題に関連のある文献をクリティークしながら探索しながら具体化し、適切な方法を決定するまでの過程学ぶ。</p> <p>(11 土澤 健一)</p> <p>個人や集団を対象とした地域における健康課題を多方面から検索し、先行研究を吟味して現状と課題を把握するための基礎を学ぶ。また、課題解決に向けた研究方法及びデータ分析について理解するとともに、倫理的配慮や利益相反について学ぶ。さらに、研究成果の発表方法について理解を深める。これらを通して、修士論文の研究計画書作成のための基礎を身に付ける。</p> <p>(12 藤原 健一)</p> <p>個人や集団を対象とした地域における健康課題を多方面からエビデンスの検索方法を学び、検索した先行研究を吟味し、地域における個人や集団の健康問題に関する現状と課題を把握するための基礎を学ぶ。また、課題解決に向けた研究方法及びデータ分析について理解するとともに、倫理的配慮や利益相反について学ぶ。さらに、研究</p>	
--	--	---	--

		<p>成果を発表するための基礎について理解を深める。これらを通して、修士論文の研究計画書作成のための基礎を身に付ける。</p> <p>(13 佐藤 彰博)</p> <p>地域における個人や集団を対象とした健康課題に関連する先行研究を幅広い視点で文献検索する。検索された文献から概念モデルと構造化抄録を作成し、研究デザインと統計手法を精査する。また、文献の検出力分析を行うことで、サンプルサイズ計算についても学ぶ。加えて、臨床研究における倫理的配慮や利益相反、クリニカル・クエスチョンからのリサーチ・クエスチョンの作成、概念モデルの作成、研究デザインの選択、解析デザインを学びながら構造化抄録の作成方法を学修する。さらに、成果発表のためのスライド作成、抄録作成、学会発表の仕方についても学修する。</p> <p>(14 岩間 孝暢)</p> <p>地域健康支援における研究について、現状と課題を把握する。そのうえで、地域住民の抱える健康課題を明らかにし、代表的な研究実践方法の中から支援のための方策を探求する。文献レビューを基に研究デザインを検討し、研究計画書を作成する。地域における健康課題を取り扱う際に関連が深い、疫学研究の基礎、コホート研究・横断研究に焦点を当てつつ、データを収集するとともに統計解析を行い、成果を取りまとめる。スライドの作成や Proceeding Paper を作成して成果報告発表のための準備を行う。</p> <p>(15 小山内 筆子)</p> <p>研究課題を設定するために関連領域の文献検索を行い、地域における健康課題を多方面から探求する。研究課題解決のための研究展開や具体的な研究方法を学ぶ。さらに、研究を遂行する上での倫理的配慮や利益相反について学修する。</p> <p>(16 細川 洋一郎)</p> <p>地域における個人や集団を対象とした健康課題を多方面から探求する。そのために文献検索の方法について学び、参考となる先行研究の文献検討を行う。それを基に研究デザインを作成し、その上で倫理的配慮や利益相反について学ぶ。さらに研究課題に基づく概念の枠組みの構築と、結論に至る因果関係について学び、研究計画書の作成につなげる。また基本的なデータの集計や分析方法の概要について学ぶとともに、研究成果の発表方法に関してはスライド・抄録の作成をはじめ国</p>	
--	--	---	--

		<p>内外での学会発表の基礎について学修する。</p> <p>(17 成田 秀美)</p> <p>研究に関する一連のプロセスを概観し、臨床の 実践および文献の検討から関心のある地域健康 支援について、現状の把握と研究課題を探索し決 定する。質的研究や量的研究のデザインを学び、 データの収集方法について学ぶ。また、研究計画 の意義、倫理的配慮も含め作成方法を学ぶ。</p> <p>(18 高瀬 園子)</p> <p>地域における個人や集団を対象とした各自の 健康課題について関連する国内外の文献検討を 通して、課題解決に向けた具体的な研究方法を修 得する。具体的には、文献収集方法、文献レビュ ー、文献クリティークを行う。次に、研究デザイ ンの選定、対象者、データ収集方法、倫理的配慮、 研究依頼といった研究方法の検討、課題解決に沿 ったデータ解析（量的研究、質的研究）方法を検 討する。最後に各自の健康課題の文献検討を発表 し研究方法を明確化する。</p> <p>(19 浅田 一彦)</p> <p>地域における健康課題を多方面から探求する とともに、課題解決の具体的な方法について検討 するにあたり、まずは研究の進め方について学 ぶ。例えば、「失語症や高次脳機能障害をもちなが ら地域で生活する人々に対する支援にはどのよ うな方法があるだろうか？」といった漠然とした クリニカル・クエスチョンを、より具体的なりサ ーチ・クエスチョンに整理する必要がある。その ために、先行研究を批判的に吟味することにより 何を解明すべきかを明らかにしていく（文献抄 読）。研究テーマを絞ることができたら、自身のリ サーチ・クエスチョンに応じた適切な研究法を選 択し、研究の実施計画を立案してみる（研究計画 の検討）。授業では、予備データ収集の検討まで行 う。</p>	
	<p>地域健康支援学特別演習</p>	<p>(概要)</p> <p>地域健康支援学基礎特論での学修内容を踏ま え、個々の修士論文に関連した文献検討を行い、 研究テーマに即した研究計画書を作成し、研究倫 理委員会での審査を受ける。これらの成果を1回 目の合同中間報告会で発表する。2回目の中間報 告会ではデータ収集・分析までとする。さらに予 備審査会に向けた準備も行い発表する。国内外で の学会発表に向けた抄録の作成や投稿の方法に</p>	

		<p>についても学ぶ。授業形態は演習である。</p> <p>(1 西沢 義子)</p> <p>「地域健康支援学基礎特論」での学修内容を基に修士論文のテーマに沿った文献検討を行い、研究計画書の作成を行う。研究倫理委員会への申請準備として研究倫理講習ならびに eLCoRE を受講するとともに利益相反申告書を提出する。I 期中間報告会（5 月開催予定）に向けた発表準備を進める。</p> <p>I 期中間報告会では参加者からの意見を基に可能な範囲で研究計画書の修正を行う。データ収集・分析の結果を含めⅡ期中間報告会（9 月開催予定）の準備を進める。さらに予備審査会（10 月～11 月）に向けた準備を行い修士論文の概要を発表する。</p> <p>研究成果に関しては国内外での学会発表に向けた抄録の作成と投稿の準備を進める。</p> <p>(2 小玉 有子)</p> <p>自己の修士論文に関連した文献を、実際に文献検討する。また、研究計画書を作成し、研究倫理委員会へ倫理審査を申請する。eLCoRE を受講して、利益相反申請書を提出する。I 期中間発表会に向けて準備を進め、終了後は、報告会での指摘や質問を基に、研究計画書を修正する。2 期中間報告会に向けて準備を進め、予備審査会では、修士論文の概要を報告できる。</p> <p>(3 木田 和幸)</p> <p>研究テーマに関連した先行研究の検索、研究計画書の作成や成果発表（中間報告会）、ならびに国内外での学会発表や投稿の方法など、研究テーマ設定から論文作成までの一連の課程を学修する。</p> <p>(① 松尾 泉)</p> <p>修士論文に関連した文献検討、研究計画書の作成や成果発表（中間発表会）、ならびに国内外での学会発表や投稿の方法について学ぶ。具体的には、研究計画書及び研究関連資料の作成方法、研究倫理委員会への申請書作成と申請方法を学ぶ。自らの研究計画に基づき、データ収集及びデータ分析を行いながら、その方法を実践的に学ぶ。5 月と 9 月には、研究の進捗状況及び研究成果を中間報告会で発表する。発表後は修士論文の作成を開始し、11 月の予備審査会に向けたプレゼンテーションの準備を行う。</p> <p>(5 福岡 裕美子)</p> <p>自己の修士論文に関連した文献検討の内容の</p>	
--	--	--	--

		<p>まとめと文献リストを作成する。研究計画書を作成し、研究倫理委員会へ倫理審査の申請を行う。eLCoREを受講し利益相反申告書を提出する。第1回中間報告会での報告準備を進め、報告会後はいただいた意見を基に研究計画書を修正する。データ収集・分析を進め、第2回中間発表会に備え準備を進める。予備審査会では、修士論文の概要を報告する。</p> <p>成果発表に関しては、学会発表や論文投稿の方法について学ぶ。</p> <p>(6 中根 明夫)</p> <p>新型コロナウイルス感染症、インフルエンザの流行や地域住民の脅威であり続ける結核など、感染症に対する地域住民の感染予防対策（日常生活、非常時）やワクチンによる積極的な感染予防、さらに、病院、施設、在宅における感染予防対策の改善・支援を促進するための研究テーマを定め、研究計画、研究実施、倫理的配慮、とりまとめ、学会発表、プレゼンテーションといった研究のプロセスを体験し、研究とはどのようなものかを体得していく。</p> <p>(7 板垣 喜代子)</p> <p>地域健康支援に関する論文作成プロセスの修得のため、自己の研究課題に関する文献の検討、研究計画書作成や成果発表（中間報告会）、ならびに国内外での学会発表や投稿の方法について学ぶ。</p> <p>研究テーマを設定後、研究計画書を作成し、研究倫理委員会へ申請する、調査・実験によるデータ収集と質的・量的分析を行う。</p> <p>成果を発表するための中間報告会で発表する。また、国内外への学会への参加や発表や投稿の準備をおこなう。また、中間発表会で受けたアドバイスを基づいて、論文の修正を行う。</p> <p>(8 工藤 千賀子)</p> <p>地域健康支援学基礎特論で学修した内容と各自の研究課題との関連を明確にし、先行研究や関連文献のクリティークの重要性について学ぶ。研究課題を解決するため、研究目的や研究方法を明確にし、研究計画書および修士論文の概要を作成する。そのプロセスを通して、研究の基礎的能力を修得する。</p> <p>(9 川崎 くみ子)</p> <p>自己の研究課題に沿った研究プロセスを研究計画書に反映し、成果発表や論文投稿の方法について学び実践する。具体的には、「地域健康支援学</p>	
--	--	--	--

		<p>基礎特論」にて明確となった自己の研究課題に沿って文献検討を進め、研究デザインを検討する。次に、研究計画書や実施に必要な文書類を作成し、倫理審査委員会へ申請する。審査結果を受け、研究計画を展開し、中間報告会では、計画内容、データの集計・分析などについて具体的に発表する。予備審査会では、研究プロセスを踏まえて修士論文の概要を発表し、学会発表や論文投稿の準備をする。</p> <p>(10 工藤 うみ)</p> <p>修士論文に関連した文献検討、研究計画書の作成や成果発表(中間報告会)、ならびに国内外での学会発表や投稿の方法について学ぶ。具体的には、研究計画書および研究関連資料の作成方法、研究倫理委員会への申請方法を学ぶ。自らの研究計画に基づきデータ収集およびデータ分析を行いながらその方法を実践的に学ぶ。5月と9月には研究の進捗状況および研究成果を中間報告会で発表する。発表後は修士論文の作成を開始し、11月の予備審査会に向けプレゼンテーションの準備を行う。</p> <p>(11 土澤 健一)</p> <p>地域健康支援学基礎特論で学んだ研究方法や研究成果発表を基に、修士論文のテーマに沿った先行研究を概観し、研究の背景、研究の目的、研究の対象と方法、具体的分析方法を検討する。検討結果を基に研究計画書を作成する。また、研究倫理委員会への倫理審査申請の準備として、研究倫理eラーニングを受講するとともに、利益相反申告書を作成する。I期中間報告会の準備を行い、中間報告として発表する。発表時に得られた貴重な意見を参考に修士論文の研究計画書の修正を行う。修正した研究計画書に基づき、研究を進め、データ収集、データ分析を含めてII期中間報告会の準備と発表を行う。さらに、予備審査会の準備として修士論文の概要をまとめ、予備審査会で発表する。研究成果については、学会発表に向けた抄録の作成と論文投稿の準備を進める。</p> <p>(12 藤原 健一)</p> <p>地域健康支援学基礎特論で学んだ研究方法や研究成果発表に関する基礎知識を基に、修士論文のテーマに沿った先行研究を概観し、明らかになっていることと明らかになっていないことを整理し、研究の目的、研究の対象と方法、分析方法を検討する。検討した結果に基づいて研究計画書を作成する。また、研究倫理委員会への倫理審査に関する申請の準備として、研究倫理eラーニン</p>	
--	--	--	--

		<p>グを受講するとともに、利益相反申告書を作成する。Ⅰ期中間報告会の準備を行い、中間報告として発表する。発表時に得られた意見・助言を参考に修士論文における研究計画書の修正を行う。修正した研究計画書に基づき、データ収集・分析を含めてⅡ期中間報告会の準備と発表を行う。さらに、予備審査会の準備として修士論文の概要をまとめ、予備審査会で発表する。研究成果については、学会発表に向けた抄録の作成と論文投稿の準備を進める。</p> <p>(13 佐藤 彰博)</p> <p>「地域健康支援学基礎特論」で学修したことを基に、指導学生の研究のためにクリニカル・クエスションに関連する先行研究の検索と文献データベースの作成、リサーチ・クエスションの作成、概念モデルの作成、研究デザインの選択、アウトカム変数の選択、解析デザイン、構造化抄録の作成を指導する。加えて、研究計画書の作成、倫理委員会への倫理申請、eLCoREを受講し利益相反申告書を提出する。さらに、中間発表会での指摘を基に研究計画を修正した上でデータ収集を行い、予備審査会に向けた準備をしながらデータ解析、論文作成、学会発表、論文投稿までの一連の過程を学修する。</p> <p>(14 岩間 孝暢)</p> <p>地域健康支援の基礎と実践として、文献レビュー、研究倫理を遵守しての修士論文を作成する。第Ⅰ期中間報告会への発表を準備する（プレゼンテーション、スライド作成等）。</p> <p>第Ⅰ期中間報告の課題整理と修士論文の修正を行い、第Ⅱ期中間報告会への準備を行う。発表後は指摘内容を精査するとともに、予備審査会へ備える。</p> <p>その後、研究成果を国内・外での関連学会へ発表するための抄録を作成するとともに、投稿準備を行う。</p> <p>(15 小山内 筆子)</p> <p>地域健康支援学基礎特論で学修した内容を基に自己の研究課題に関連する先行研究の文献クリティークを行い、研究デザインを検討し、研究計画書を作成する。研究倫理eラーニングを受講し、利益相反申告書を提出するとともに研究計画書を研究倫理委員会へ申請する。中間報告会での参加者からの意見を参考に研究計画書を修正し、データ収集・分析の結果をまとめ、修士論文を作成する。11月の予備審査会で修士論文の概要を発表する。</p>	
--	--	---	--

		<p>研究成果に関しては国内外での学会発表に向けた抄録の作成と投稿の準備を進める。</p> <p>(16 細川 洋一郎)</p> <p>「地域健康支援学基礎特論」での学修内容を基に、関連する先行文献検討を詳細に行い、研究計画書の作成を行う。倫理申請が必要な研究課題では、研究倫理委員会への申請準備として研究倫理講習ならびに eLCoRE を受講するとともに利益相反申告書を提出する。I 期中間報告会（5 月開催予定）に向けた発表準備を進める。</p> <p>I 期中間報告会では参加者からの意見を基に可能な範囲で研究計画書の修正を行う。データ収集・分析の結果を含め II 期中間報告会（9 月開催予定）の準備を進める。さらに予備審査会（10 月～11 月）に向けた準備を行い修士論文の概要を発表する。</p> <p>研究成果に関しては国内外での学会発表に向けた抄録の作成と投稿の準備を進める。</p> <p>(17 成田 秀美)</p> <p>「地域健康支援学基礎特論」で立案した研究課題を探究するための適切な研究デザインとその方法について模擬データを用いて実際に検討し、分析をする。研究への協力者に対する説明の仕方や同意書をとる際の配慮等についても検討を加え、研究計画書を作成する。さらに、研究計画書およびデータ集計・分析の公开发表に向けた準備を行う。</p> <p>(18 高瀬 園子)</p> <p>修士論文の作成に向けた研究計画書の作成、成果発表方法について学ぶ。具体的には、地域健康支援学基礎特論での文献検討に基づき、研究の目的、意義、具体的な研究方法（研究デザイン、データ収集方法、データ分析）、研究倫理、研究依頼に関する検討を行い、研究計画書の作成と研究倫理審査申請書の作成を行う。収集したデータの解析、図表の作成、研究成果のプレゼンテーション、学会発表や論文投稿といった研究方法の一連のプロセスを修得する。</p> <p>(19 浅田 一彦)</p> <p>地域健康支援学基礎特論での学修内容を踏まえ、I 期中間報告会までに個々の修士論文に関連した文献検討を行い、研究テーマに即した研究計画書を作成する。また、研究倫理委員会への倫理審査申請の準備として、研究倫理 e ラーニングを受講するとともに、利益相反申告書を作成する。統計・解析の検討、結果をまとめ、II 期中間報告</p>	
--	--	--	--

		<p>会に臨む。予備審査会までに論文作成、修正、完成、プレゼンテーション資料を作成する。最終的に、国内外での学会発表に向けた抄録の作成と投稿の準備を行う。</p>	
	<p>地域健康支援学特別研究</p>	<p>(概要)</p> <p>個人、集団を対象とした地域健康支援に関わる自己の研究課題に対して、地域健康支援学基礎特論、地域健康支援学特別演習で学修した知識を基盤とし、データ収集・解析を進め、修士論文を作成する。具体的には研究目的に沿った研究デザイン・研究方法により収集したデータを適切な分析・解析方法を用い、図表等を用いながら簡潔明瞭に結果を示す。また、結果については論理的に考察をまとめる。本審査会ならびに公開型発表会においては分かりやすく伝えるように工夫する。授業形態は講義である。</p> <p>(1 西沢 義子)</p> <p>「地域健康支援学基礎特論」ならびに「地域健康支援学特別演習」での学修成果を基に、修士論文の作成から成果発表までのプロセスについて学修する。</p> <p>具体的には個々の生活習慣に起因する健康課題と要因を明らかにし、健康課題に対する効果的な支援方法を模索する。また、地域防災の視点から放射線リスクコミュニケーションに関わる課題も取りあげる。研究目的に沿った研究デザイン、対象者の選定、データ収集ならびに量的・質的分析方法を用い、結果を分かりやすくまとめる。さらにエビデンスに基づいた考察を行い、論文全体を通して論理的に記述する。</p> <p>(2 小玉 有子)</p> <p>地域健康支援学基礎特論・地域健康支援学特別演習で学んだ基本的な知識を基に、研究課題を明確にし、研究計画書を作成する。実際にデータを収集し、論文を作成する。</p> <p>地域の若者が抱える発達課題や社会情勢に鑑みた課題等に焦点を当て、若者の健全な社会参加を支援するための研究課題を明確にし、適切な研究方法に則り、修士論文にまとめる。</p> <p>(3 木田 和幸)</p> <p>地域健康支援学基礎特論や地域健康支援学特別演習で学んだ知識や研究手法などを基盤とし、地域で生活する人々の身体活動や食生活などの生活習慣とその関連要因に関する課題や問題点</p>	

		<p>に焦点を当て、学んだ研究手法を具体化し、研究テーマ設定からデータ収集・解析、論文作成までの一連の課程を実施・学修するとともに、修士論文を作成する。</p> <p>(① 松尾 泉)</p> <p>個人、集団を対象とした地域健康支援に関わる課題を設定し、地域健康支援学基礎特論や地域健康支援学特別演習で学んだ知識を基盤とし、データ収集・解析を進め、修士論文を作成する。研究目的に沿った研究デザインや分析・解析方法を用い、結果について論理的な考察を行う。具体的には、対象の生活の場をフィールドに実施する健康教育等支援活動で得られたテキスト及び数量的データを解析ソフトなど用いて内容分析し、対象の特徴や介入効果を明らかにする。修士論文を執筆するプロセスを通じて自己の研究に対する理解をさらに深め、本審査会や公開型発表会に向けて、わかりやすいプレゼンテーションおよび質問への対応に関する準備を行う。</p> <p>(5 福岡 裕美子)</p> <p>地域健康支援学基礎特論や地域健康支援学特別演習で学んだ知識を基に、研究テーマの明確化、研究計画書の作成、データ収集と結果、論文作成までの過程において指導する。</p> <p>地域で暮らす高齢者とその家族が持つ様々な問題や、地域在住高齢者を取り巻く地域の課題に焦点をあて、研究課題を明確化し適切な研究手法を用い、データ収集・分析、考察することにより修士論文としてまとめる。</p> <p>(6 中根 明夫)</p> <p>新型コロナウイルス感染症、インフルエンザの流行や地域住民の脅威であり続ける結核など、感染症に対する地域住民の感染予防対策（日常生活、非常時）やワクチンによる積極的な感染予防、さらに、病院、施設、在宅における感染予防対策の改善・支援を促進することを目的とする研究を行う。研究テーマについて研究計画、研究の実施、研究結果の統計学的評価や考察を行い、修士論文として研究成果をとりまとめ、学会発表および学術雑誌への投稿を行う。</p> <p>(7 板垣 喜代子)</p> <p>個人、地域の様々な集団を対象とした防災及び災害時の地域健康支援に関わる課題を設定し、地域健康支援学基礎特論やこれまでに修得した知識、技術を基盤とし、データ収集・解析を進め、修士論文を作成する。</p>	
--	--	--	--

		<p>研究目的に沿った研究デザイン・モデル構築に関する支援や、データの分析・解析方法についての学修の支援を行う。本審査会ならびに公開型発表会に向けた支援を行う。</p> <p>(8 工藤 千賀子)</p> <p>医療・看護における倫理に関する研究課題や喫煙行動に対する指導・教育における方言に関する研究課題について、課題達成に向けて、方法論的探究に取り組む。自己の研究課題と関連文献との関連を考察し、研究目的を明確にする。研究目的に沿った研究デザイン、データの分析、論理的な考察を通して、修士論文を作成する。そのプロセスを通して、研究者としての態度を養う。</p> <p>(9 川崎 くみ子)</p> <p>修士論文作成のため、自己の課題に沿って研究計画書作成～成果発表までのプロセスを展開する。具体的には、「地域健康支援学基礎特論」で明確にした各自の研究課題に対し、「地域健康支援学特別演習」ではその課題に沿って具体的な研究プロセスの要点を学び実践する。その内容を反映させながら、データ収集・解析を進め、修士論文を作成する。</p> <p>指導可能な研究領域は、生命倫理、医療倫理、看護倫理における倫理的問題に関連した領域であり、個人や集団の地域健康支援に関わる倫理的な課題に着目して展開する。</p> <p>(10 工藤 うみ)</p> <p>地域における終末期ケア、地域の保健福祉施設におけるケア管理などの研究テーマに関して、地域健康支援学基礎特論や地域健康支援学特別演習で学んだ知識を基盤とし、データ収集・解析を進め、修士論文を作成する。研究目的に沿った研究デザインや分析・解析方法を用い、結果について論理的な考察を行う。研究プロセスや結果の解釈について、修士論文を執筆する行為を通して確認や振り返りを行い、自己の研究に対する理解を深める。本審査会ならびに公開型発表会に向けて、分かりやすく伝えるプレゼンテーションおよび質問への対応に関する準備を行う。審査会や発表会で評価されることで、より完成度の高い論文作成に向けた修正方法を学ぶ。</p> <p>(11 土澤 健一)</p> <p>地域健康支援学基礎特論及び地域健康支援学特別演習で学んだ地域における個人または集団の健康問題に対する支援に関する課題解決に向けた研究手法を基に、修士論文の作成から研究成</p>	
--	--	---	--

		<p>果の発表までの一連の過程について学修する。具体的には、作業療法の役割や位置付けに関連するテーマ、地域に暮らす健常者や精神障害者を対象者としたQOLに関連する研究課題について、研究の目的に沿った対象者の選定、研究デザイン及び分析方法を決定し、データの収集を行う。得られたデータを集計、分析し、結果をまとめ、結果について考察する。特に、論文全体を通して論理的に記述する。研究成果は、主査1名、副査2名による本審査会で学位審査を受け、合格した場合には公開型発表会で成果発表する。公開型発表会においては研究内容を理解し、専門領域外の参加者に対して質疑応答も含めて内容をわかりやすく伝える。</p> <p>(12 藤原 健一)</p> <p>地域健康支援学基礎特論及び地域健康支援学特別演習で学んだ地域における個人または集団の健康問題に対する支援に関する課題解決に向けた研究手法を基に、修士論文の作成から研究成果の発表までの一連の過程について学修する。具体的には、障害者の在宅復帰に向けた活動と参加への支援、地域生活を継続するための介護予防に関連する研究課題について、研究目的に沿った対象者の選定、研究デザイン及び分析方法を決定し、データの収集を行う。得られたデータを集計後、分析し、結果としてまとめ、結果について考察する。特に、論文全体を通して論理的に記述する。研究成果は、主査1名、副査2名による本審査会で学位審査を受け、合格した場合には公開型発表会で成果発表する。公開型発表会においては研究内容を理解し、専門領域外の参加者に対して質疑応答も含めて内容をわかりやすく伝える。</p> <p>(13 佐藤 彰博)</p> <p>「地域健康支援学基礎特論」や「地域健康支援学特別演習」で学んだ知識を基盤とし、研究テーマに関する研究指導を行う。研究課題は、手外科疾患を中心とした運動器疾患に関するものとし、リハビリテーションにおける評価の妥当性・信頼性・開発、QOLに影響する要因、QOLや症状改善のためのリハビリテーションの効果に関する研究を実施して修士論文を作成する。</p> <p>(14 岩間 孝暢)</p> <p>研究命題を形成し、研究倫理に基づいた研究計画を作成する。まずは作成した研究計画に基づいて、研究構想をプレゼンテーションしてもらいながら、研究計画の精度を高める。次に適切な研究方法を選択し、研究を進めることで修士論文を完</p>	
--	--	--	--

		<p>成させる。研究テーマは、三次元動作解析装置を用いた健常者の体幹支持性と上肢リーチ動作に関すること、定型（運動）発達の遅れを有する障害児に対する姿勢と遊びに関すること、一般住民またはデイケアを利用する精神障害者を対象とした動脈硬化や肥満に関連する健康調査とし、研究が計画に沿って進んでいることを確認しながら、研究結果を分析して考察を行う。研究テーマや研究方法の変更が必要になった場合は、速やかに研究計画を修正する。得られた成果を関連学会等で発表する。</p> <p>(15 小山内 筆子)</p> <p>地域健康支援学基礎特論や地域健康支援学特別演習で学んだ知識を基に、修士論文作成から成果発表までのプロセスを学び展開する。</p> <p>具体的には、吃音児・者及びその家族を対象とした在宅で行う治療法の開発に関連する研究課題とする。研究目的に沿った研究デザイン（研究方法）、対象者の選定、データ収集・分析、結果から考察し、修士論文を作成する。</p> <p>(16 細川 洋一郎)</p> <p>「地域健康支援学基礎特論」ならびに「地域健康支援学特別演習」での学修成果を基に、修士論文の作成から成果発表までのプロセスについて学修する。特に放射線の健康影響や放射線防護対策等に関連するテーマにおいて研究目的に沿った研究デザイン、対象者の選定、データ収集ならびに量的・質的分析方法を用い、結果を分かりやすくまとめる。さらにエビデンスに基づいた考察を行い、論文全体を通して論理的に記述する。</p> <p>(17 成田 秀美)</p> <p>精神機能は目に見えないことから、対象者に対する包括的アプローチには、より科学的・学術的な視点が重要となる。「地域健康支援学基礎特論」、「地域健康支援学特別演習」で学んだことを基盤として、高次脳機能障害を含めた精神機能障害に対する地域健康支援の研究課題について、研究の趣旨、倫理的、社会的に配慮したデータ解析方法、そのデータを基に修士論文を作成する。</p> <p>(18 高瀬 園子)</p> <p>地域健康支援学特別演習で作成した研究計画書に基づき、論文作成の一連のプロセスを修得する。具体的には、地域の子育て期の母親・父親の育児支援や父親を対象としたクッキング教室を研究課題とし、倫理審査申請書に基づき、研究依頼、健康支援の介入、データ収集を行う。妥当性、</p>	
--	--	---	--

		<p>再現性を踏まえた量的及び質的データ解析、結果の纏め方、考察、結論、研究の限界と今後の課題を明らかにする。学位審査会と公開型発表会を通して発表方法を学ぶ。審査会や発表会で評価されることで、より完成度の高い論文作成に向けた修正方法を学ぶ。</p> <p>(19 浅田 一彦)</p> <p>言語障害、コミュニケーション障害、嚥下障害をもちながら地域で生活する人々に対する支援といった研究テーマに関して、地域健康支援学基礎特論、地域健康支援学特別演習で学修した知識を基盤とし、データ収集・解析を進め、修士論文を作成する。研究目的に沿った研究デザイン・研究方法により収集したデータを適切な分析・解析方法を用い、図表等を用いながら簡潔明瞭に結果を示し、さらに論理的に考察をまとめられるようになる。</p>	
--	--	--	--

学校法人弘前城東学園設置認可等に関わる組織の移行表

令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
弘前医療福祉大学				弘前医療福祉大学				
保健学部				保健学部看護学科				
看護学科	50	—	200	50	—	200		
医療技術学科				医療技術学科				
作業療法学専攻	40	—	160	40	—	160		
言語聴覚学専攻	30	—	120	30	—	120		
計				計				
	120	—	480	120	—	480		
弘前医療福祉大学短期大学部				弘前医療福祉大学短期大学部				
救急救命学科(3年制)	35	—	105	35	—	105		
口腔衛生学科(3年制)	30	—	90	30	—	90		
計				計				
	65	—	195	65	—	195		
別科 調理師養成・1年課程	30	—	30	30	—	30		
別科 介護福祉科	30	—	60	30	—	60		
計				計				
	60	—	90	60	—	90		
				弘前医療福祉大学大学院				大学院新設
				地域健康支援学研究所				
				地域健康支援学専攻(M)				
				5	—	10		
				計				
				5	—	10		